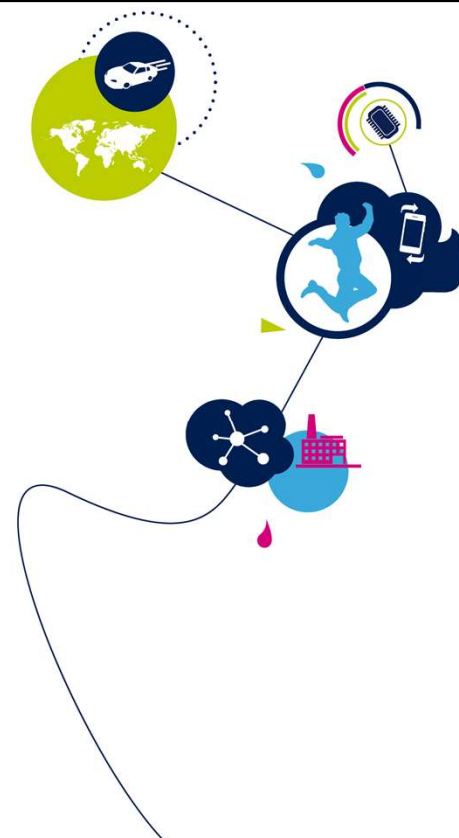


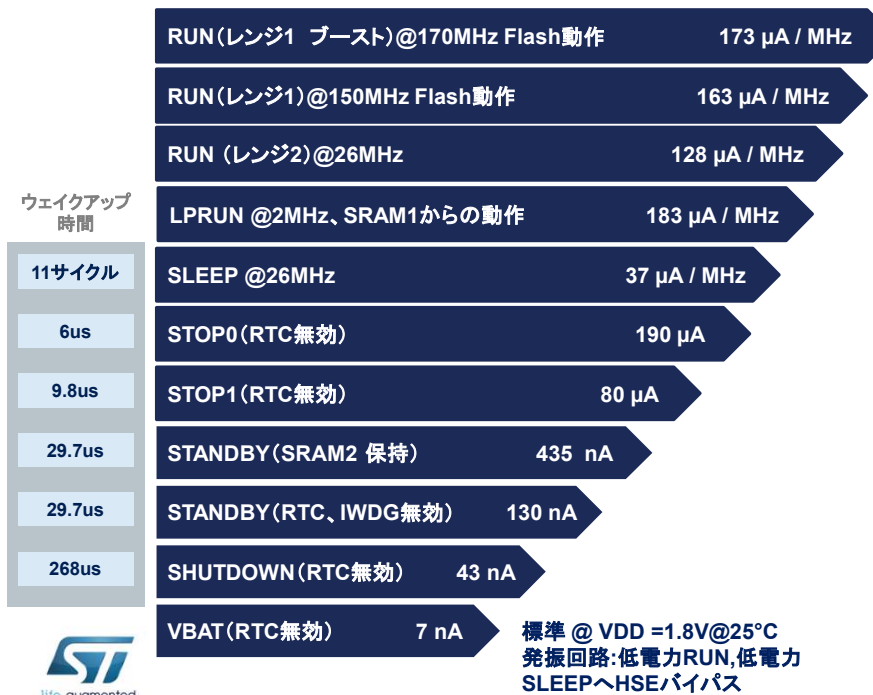
STM32G4 - PWR

電源コントローラ

1.0版



STM32G4電源コントローラのプレゼンテーションへようこそ。
STM32G4の電源管理機能とすべての低電力モードについて、このプレゼンテーションで説明します。



- 柔軟な電力コントロール
 - 効率的実行
 - 7つの低電力モード、いくつかのサブモード
 - 高い柔軟性

アプリケーション側の利点

- 高性能
 - CoreMarkスコア=3.42/MHz
- 優れた電力効率



STM32G4デバイスは、柔軟な電力コントロールのモードを特徴としており、アプリケーション全体の消費電流をさらに低減します。この資料では、STM32G474のさまざまな電源モードでの消費電流について詳しく説明します。

RUNモードでは、最大170MHzで稼働するシステムクロックをサポートし、173 μ A/MHzで動作します。

26MHzでは、消費電流はさらに低くなります:128 μ A/MHz。

STM32G4デバイスは、7つの主要な低電力モードをサポートしています。:低電力RUN、SLEEP、低電力SLEEP、STOP0、STOP1、STANDBY、SHUTDOWNモード。

各モードはさまざまな方法で設定可能であり、追加でいくつかのサブモードを備えています。

またSTM32G4デバイスは、VBATと呼ばれるバッテリーバックアップドメインに対応しています。

柔軟性の高い電源管理により、CoreMarkスコアで3.42/MHzと優れた電力効率を実現します。

- 7種類の低電力と高速ウェイクアップ
 - I/Oウェイクアップでは最小130nA
 - 16KB SRAM2保持@1.8V、25°C、RTCオフで435nA以下
 - 多数のペリフェラルからのウェイクアップ
- 最大周波数でのRUNモードで173μA/MHz
- RTCとバックアップ・レジスタによるVBATバッテリー・バックアップ・モード

アプリケーション側の利点

- アクティブなペリフェラル、求められる性能、必要なウェイクアップソースに合わせた低消費電力に対する高い柔軟性
- バッテリー寿命の延長
- 外部シフトの削減によるBOMコストの削減



STM32G4には、I/O上のイベントによるMCUのウェイクアップが可能でありながらも最小130nAの低電力モードなど、電源管理に関するいくつかの主要機能があります。

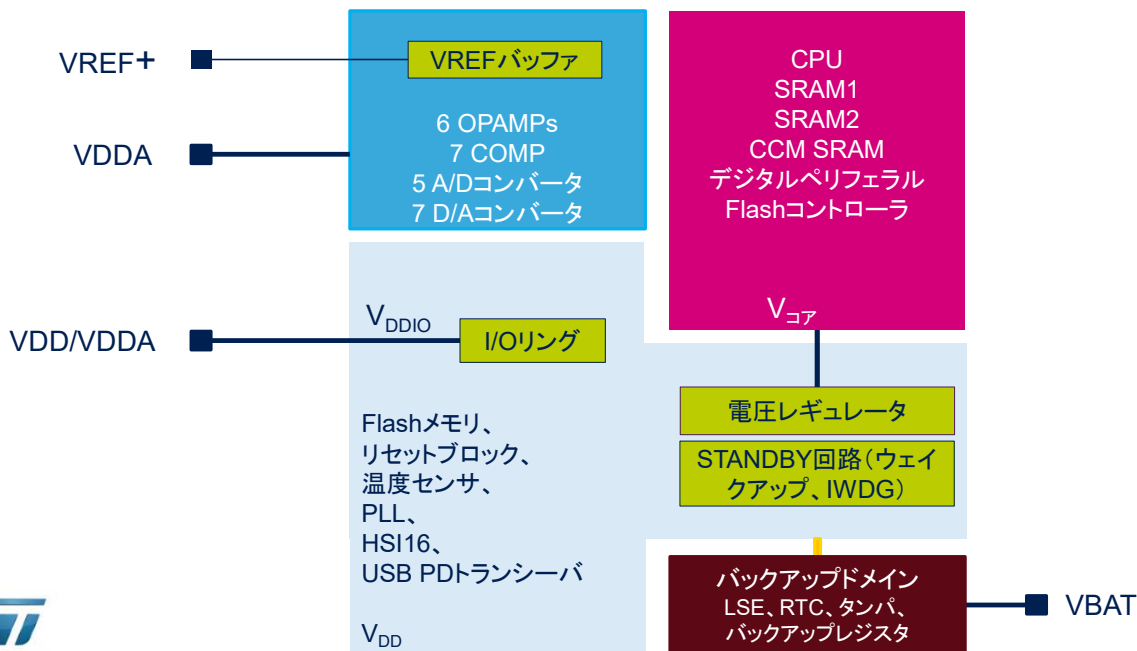
1.8VVDD電源においてわずか435nAで、16KBのSRAMを保持することができます。

数多くのペリフェラルは、各種の低電力モードからウェイクアップ可能です。

Flashメモリからの実行で、動的消費電流は最小128 μ A/MHzです。VBATと呼ばれるバッテリーバックアップドメインにはRTCと特定のバックアップレジスタが含まれます。

いくつかの電源は独立しており、一部のペリフェラルがより高い電圧で供給されている間、MCUの消費電力を削減することができます。

多数の電源モードにより、STM32G4デバイスは、電力消費を最小限に抑え、アクティブなペリフェラル、求められる性能、必要なウェイクアップソースに合わせて調整する高い柔軟性を提供します。



STM32G4デバイスには、複数の独立した電源装置があり、異なる電圧で設定したり、一緒に接続することができます。主電源はVDDで、VBATドメインの部分を除くほとんどすべてのI/Oを供給します。

またVDDは、Flashメモリ、リセットブロック、温度センサ、内蔵のクロックソースも提供します。さらに、ウェイクアップロジックと独立したウォッチドッグを含むスタンバイ回路に供給します。

VDDは、VCORE電源を供給する電圧レギュレータに供給します。

VCOREは、デジタルペリフェラル、SRAMやFlashメモリコントローラのほとんどに電圧を供給します。

VDDA電圧はアナログペリフェラルに電圧を供給します。

VREF+ピンは、アナログからデジタルへのリファレンス電圧とデジタル-アナログ変換器に対する基準電圧を提供します。

また、有効にした場合の内部電圧リファレンスバッファの出力にもなります。

バックアップ・バッテリーをVBATピンに接続して、バックアップ・ドメインを提供できます。

独立した電源により、電力とパフォーマンスを最適化

- VDD 1.71V~3.6V(パワーダウン時1.6Vまで)
 - 他の独立した電源が提供される場合は、VDDの設定が必要
- V_{DDA} 1.62V~3.6V
 - A/DコンバータまたはCOMPを使用する場合: 最小1.62V
 - D/Aコンバータを使用する場合: 最小1.71V
 - OPAMPを使用する場合: 2.0V
 - VREFBUFを使用する場合: 最小2.4V
- $V_{DDA} < 2V$ の時、 $V_{REF+} = V_{DDA}$ 、 $V_{DDA} > 2V$ V_{DDA} は2Vから
- 128バイトのバックアップ・レジスタを含むRTCブロックとTAMPブロックを含む電源ドメインのVBATは1.55V~3.6V



主電源VDDによって、1.71~3.6Vのすべての電源モードでフル装備の機能が確保され、外付けの1.8Vレギュレータによる電源供給も可能となっています。

デバイスの機能は、パワーダウンリセットが発生した後の最小電圧である1.6Vまで保証されています。他の独立した電源は、ペリフェラルを異なる電圧で動作できるようにするために提供されています。

VDDAはアナログ・デジタル・コンバータ、デジタル・アナログ・コンバータ、電圧リファレンス・バッファ、オペアンプ、コンパレータ用の外部アナログ電源です。

アナログ・デジタル・コンバータまたはコンパレータを使用する場合、VDDA電圧は1.62Vより大きくなければなりません。

デジタル・アナログ・コンバータを使用する場合、VDDAは1.71Vより大きくなければなりません。

オペアンプを使用する場合、VDDAは2.0Vより大きくなければなりません。

電圧リファレンスバッファを使用する場合、VDDAは2.4Vより大きくなければなりません。

バックアップドメインはVBATによって提供され、1.55Vより大きい必要があります。バックアップドメインには、RTC、32.768kHz LSE外部発振器、および128バイトのバックアップレジスタを含むTAMPブロックが含まれています。

アナログ性能のための独立した電圧リファレンス電源

- VREF+:A/DコンバータおよびD/Aコンバータ用のリファレンス電圧
 - 外部リファレンス電圧または内部電圧リファレンス・バッファ(VREFBUF)のいずれかによって提供可能
 - VREF+ピン、および内部電圧リファレンスは、32ピン・パッケージでは使用不可
 - このパッケージでは、このピンはVDDAと二重結合されている
 - 内部電圧リファレンス・バッファは利用できないため、無効にする必要がある
 - LQFP128パッケージには2つのVREF+ピン



life.augmented

A/DコンバータおよびD/Aコンバータの電圧リファレンスは、外部電源電圧または内部リファレンスバッファのいずれかによって提供できます。

これにより、独立したリファレンス電圧を提供することで、コンバータの性能が向上します。

VREF+ピンと内部電圧リファレンスは、32ピンパッケージでは使用できません。

このパッケージでは、VREF+ピンはVDDAと二重結合されており、内部電圧バッファは無効にしておく必要があります。

このパッケージの電圧リファレンスは、VDDAピンを介して提供することができます。

LQFP128パッケージには、2つのVREF+ピンがあります。

安全で低電力リセット管理

- PORとPDRはSHUTDOWNモード以外のすべてのモードで常に有効
- ブラウンアウト・リセットは、SHUTDOWNモードを除くすべてのモードで常に有効
 - VDDの傾きに関係なく、MCUの電源が選択したしきい値を下回るとすぐにリセットを確認
 - オプション・バイトBOR_LEV[2:0]で選択された5つのしきい値 (VBOR0 = 1.7V ~ VBOR4 = 2.8V)
- STANDBYおよびSHUTDOWNを除くすべてのモードでアクティブな電源電圧検出機能
 - 7つのしきい値 + 外部ピン
- ペリフェラル電圧モニタPVM
 - VDDAを監視するための2つのPVMLしきい値



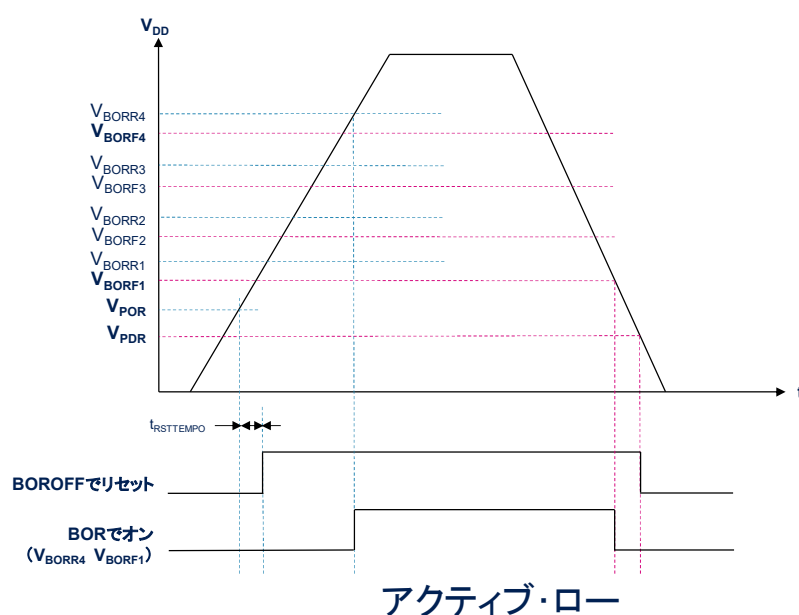
電源スーパーバイザは、安全で低電力リセット管理を保証します。STM32G4デバイスには、SHUTDOWNモード以外のすべての電源モードで常に有効になっているパワーオンリセット(またはPOR)とパワーダウンリセット(PDR)が組み込まれています。ブラウンアウト・リセット(またはBOR)は、VDDの傾きに関係なく、MCUの電源が選択されたしきい値を下回るとすぐにリセットを生成します。

Flashメモリにプログラムされたオプションバイトで、1.7~2.8Vの4つのしきい値を選択できます。

VDDが選択したしきい値を超えると、電力電圧検出機能(またはPVD)は割り込みを生成することができます。PVDはSTANDBYモードとSHUTDOWNモードを除くすべてのモードで有効にできます。しきい値は、ソフトウェアによって7つの値から選択されます。さらに、VREFINTとPVD_IN外部ピンの比較も行うことができます。VDDA電源はVDDから独立して、2つのペリフェラル電圧監視機能(またはPVM)で監視することができます。

ブラウンアウトとパワーオン/ダウン・リセット

- VDDがプログラム可能なしきい値を下回ると、ブラウンアウト・リセットがアサートされる
- SHUTDOWNモードを除いて、POR/PDRは常にオン



life.augmented

パワーリセット (BORおよびPOR) は、RTCブロックとタンパブロックと外付けの低速発振器LSEを含むVBATを搭載したバックアップメインのレジスタを除くすべてのレジスタをリセットします。STANDBYモードが終了すると、メインレギュレータが供給するすべてのレジスタがリセットされます。

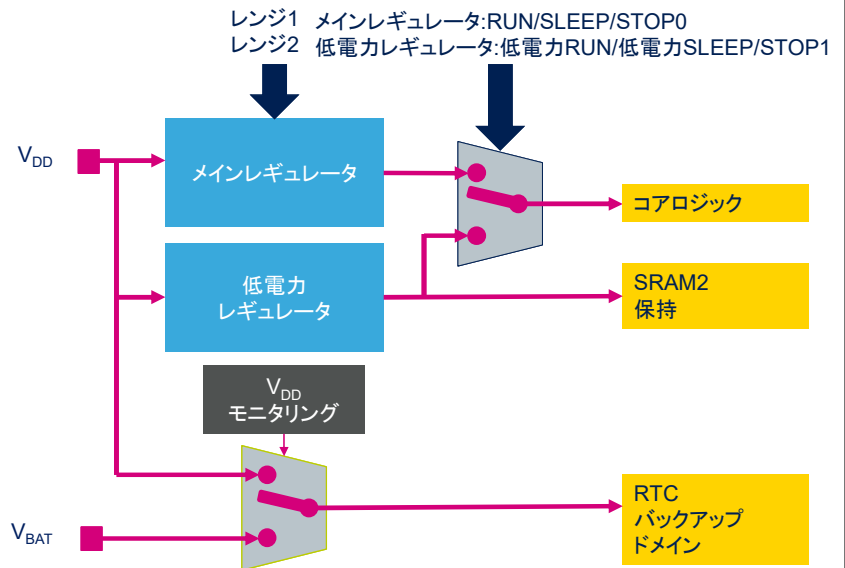
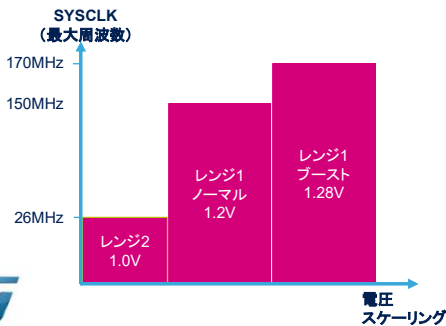
SHUTDOWNモードが終了すると、電源リセットが生成されます。5つのBORレベルはオプションバイトを通して選択できます。

電源投入中、BORは、電源電圧VDDが指定された V_{BORx} しきい値に達するまで、デバイスをリセットします。VDDが選択したしきい値を下回ると、デバイスのリセットが生成されます。

VDDが V_{BORx} の上限を超えている場合、デバイスのリセットが解放され、システムを起動できます。

2つの電圧レギュレータ

- 動的電圧スケーリング用の2つの電圧範囲を備えた1つの主要レギュレータ。RUN、SLEEP、STOP0モードで使用
- 低電力RUN、低電力SLEEP、およびSTOP1モード、およびSTANDBYモードでのRAM保持用の1つの低電力レギュレータ



2つの組み込みリニア電圧レギュレータは、スタンバイ回路とバックアップドメインを除くすべてのデジタル回路に電圧を供給します。レギュレータ出力電圧(VCORE)は、性能と消費電力の要件に応じて、ソフトウェアによって2つの異なる値にプログラムすることができます。これを動的電圧スケーリングと呼んでいます。左の図は、周波数に応じて必要なVcore電圧レベルを示しています。

アプリケーションモードに応じて、VCOREは、RUN、SLEEP、STOP0モードのメイン電圧レギュレータ、または低電力RUN、低電力SLEEP、STOP1モードの低電力レギュレータのいずれかによって提供されます。

レギュレータはSTANDBYモードとSHUTDOWNモードにおいてオフになっています。SRAM2の内容がSTANDBYモードで保持されている場合、低電力レギュレータはオンのままで、SRAM2電源を提供します。

RUNモード:レンジ1

10

利用可能なペリフェラル

- GPIO
- DMA
- FSMC
- QuadSPI
- BOR
- PVD,PVM
- UCPD
- USBデバイス
- USART
- LPUART
- I2C
- SPI
- CAN
- SAI
- ADC
- DAC
- OPAMP
- COMP
- 温度センサ
- タイマ
- LPTIM1
- IWDG
- WWDG
- Systickタイマ
- RNG
- AES
- CRC

例:Flashメモリからの実行



利用可能なクロック

- HSI16
- HSI48
- HSE
- LSI
- LSE

アクティブセル

クロックオフセル

パワーダウンのセル

利用可能なペリフェラルとクロック



RUNモードでは、CPUは動作し、プログラムは、FlashまたはSRAMメモリから実行することができます。

レンジ1では、システムクロックは最大170MHzで、レンジ2では最大26MHzです。

デフォルトでは、SRAMクロックは有効になっています。これらは、ソフトウェアによってSLEEPモード中に個別にゲートオフすることができます。

すべてのペリフェラルは、レンジ1でアクティブにすることができます。

利用可能なペリフェラル

- GPIO
- DMA
- FSMC
- QuadSPI
- BOR
- PVD,PVM
- UCPD
- USBデバイス
- USART
- LPUART
- I2C
- SPI
- CAN
- SAI
- ADC
- DAC
- OPAMP
- COMP
- 温度センサ
- タイマ
- LPTIM1
- IWDG
- WWDG
- Systickタイマ
- RNG
- AES
- CRC

例:SRAMからの実行



利用可能な
クロック

- HSI16
- HSI48
- HSE
- LSI
- LSE

アクティブセル

クロックオフ
セル

パワーダウンの
セル

利用可能な
ペリフェラルとクロック



RUNモードでの電圧スケーリングレンジ2は、26MHzまでのシステムクロックを有効にする、中規模のパフォーマンスレンジになります。

SRAMから実行する場合、Flashメモリの消費は、パワーダウンモードでFlashのクロックをオフに設定し、保存することができます。USBデバイスと乱数発生器を除くすべてのペリフェラルを起動可能です。

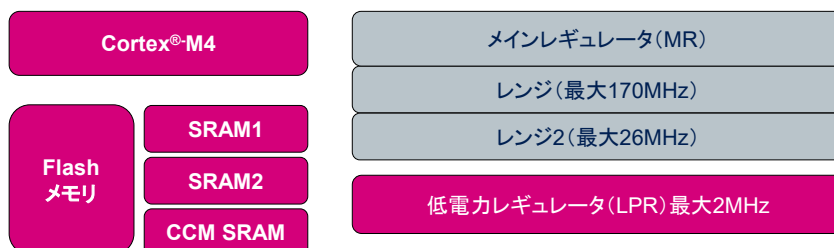
すべてのクロックを有効にできます。

低電力RUNモード

12

利用可能なペリフェラル

- GPIO
- DMA
- FSMC
- QuadSPI
- BOR
- PVD,PVM
- UCPD
- USBデバイス
- USART
- LPUART
- I2C
- SPI
- CAN
- SAI
- ADC
- DAC
- OPAMP
- COMP
- 温度センサ
- タイマ
- LPTIM1
- IWDG
- WWDG
- Systickタイマ
- RNG
- AES
- CRC



利用可能なクロック

- HSI16
- HSI48
- HSE
- LSI
- LSE



例: Flashメモリからの実行

低電力RUNモードではCPUは動作し、プログラムをFlashメモリまたはSRAMから実行することができ、さらにFlashメモリの電源を完全にオフにすることで省電力化することができます。システムクロックは2MHzに制限されています。メインレギュレータは電源を切断され、デジタルブロックへの供給は低電力レギュレータによって提供されます。低電力モードでは、USBデバイスと乱数ジェネレーター以外のすべてのペリフェラルをアクティブにすることができます。

必要なパフォーマンスと消費電力の柔軟性

電圧範囲		SYSCLK	HSI16	HSE	PLL
レンジ1	ブースト	最大170MHz	16MHz	48MHz	170MHz
	通常	150MHz			150MHz
レンジ2		最大26MHz	16MHz	26MHz	26MHz
低電力RUN		最大2MHz	ディバイダにより可能	ディバイダにより可能	不許可



life.augmented

RUNモードは、電圧スケーリングと低電力RUNモードにより、必要なパフォーマンスと消費電力との間で柔軟に対応できます。

ブーストモードがアクティブな場合のRUNモードレンジ1では、システムクロックは最大170MHzになり、内蔵および外付けの発振器とPLLが使用できます。

ブーストモードが無効の場合のRUNモードレンジ1では、システムクロックは150MHzに制限され、内蔵および外付けの発振器とPLLを使用することができます。

RUNモードレンジ2では、SYSCLLKは最大26MHzに制限され、内蔵および外付けの発振器とPLLを使用できますが、26MHzに制限しなくてはなりません。

低電力RUNモードでは、SYSCLKを最大2MHzに制限しないといけません。

- 各ペリフェラルのクロックは、オンまたはオフに設定可能
 - リセット後、すべてのペリフェラル・クロックは、Flashインタフェース・クロックを除き、OFF
 - SRAMクロックは、RUNモードで常にON
- SRAMから実行する場合 (RUNまたは低電力RUNモード):
 - Flashメモリはパワーダウン・モードに設定可能(いずれのCPUも使用していない場合)
 - FlashインタフェースクロックをOFFにすることが可能
 - 割込みベクタもSRAMに再マッピング必要



RUNモードと低電力RUNモードでは、各ペリフェラルクロックはONまたはOFFに設定可能です。

デフォルトでは、Flashインタフェースクロックを除くすべてのペリフェラルクロックはOFFになります。

SRAMクロックは、RUNモードでは常にONです。

SRAM (RUNモードまたは低電力RUNモード) から実行する場合、Flashメモリはソフトウェアによってパワーダウンモードに設定可能であり、Flashメモリクロックは停止可能です。

Flashメモリは、オフになっているときにアクセスできません。そのため割込みベクタテーブルは、Cortex M4ベクタテーブルオフセットレジスタを使用して、SRAM上に再マップする必要があります。

- RUNモードでの消費電流は、いくつかのパラメータに依存:
 - 実行されたバイナリ・コード(プログラム自体 + コンパイラの影響)
 - メモリ内のプログラムの場所(実行コードのアドレスに応じる)
 - デバイス設定(アプリケーションに応じる)
 - I/Oピンの読み込みとスイッチング・レート
 - 温度
 - FlashメモリまたはSRAMからの実行
 - Flashメモリから実行する場合:アクセラレータ設定(キャッシュ、プリフェッチ)
 - プリフェッチにより優れたエネルギー効率+キャッシュオン
 - SRAMから実行する場合
 - Flashメモリからの実行に対してエネルギー効率の向上



RUNまたは低電力RUNモードでの消費電力は、いくつかのパラメータに依存します。これは最初に実行されるバイナリコードや、プログラム自体とコンパイラの影響を受けることを意味します。次に、メモリ内のプログラムの場所、デバイスソフトウェアの設定、I/Oピンの読み込みやスイッチング速度、温度によって異なります。

また消費電力は、ユーザーコードがFlashメモリから実行されるか、SRAMから実行されるかによっても異なります。Flashプリフェッチと命令キャッシュが有効になっている場合、エネルギー効率は向上します。FlashメモリはVDD電源ドメインに属し、SRAMはVcoreパワードメインに属しているため、Flashから実行する方がSRAMからの実行よりも消費されます。

すべてのペリフェラル利用可能 最速のウェイクアップ時間

- コアが停止中、各ペリフェラル・クロックは、ONまたはOFFにすることが可能
- WFI (Wait For Interrupt) または WFE (Wait For Event) の実行により移行
- このモードに移行するための2つのメカニズム:
 - **SLEEP NOW:** MCUは、WFI/WFE命令の実行直後にSLEEPモードに移行
 - **Sleep on Exit:** MCUは、最も優先度の低いISRの終了直後にSLEEPモードに移行
 - スタックは、SLEEPモードへの移行前にもポップされず、次の割り込み発生時にもプッシュされないため、動作時間が削減される
 - Cortexシステム制御レジスタ[SLEEPONEXIT]により制御



life.augmented

SLEEPモードおよび低電力SLEEPモードでは、すべてのペリフェラルを使用可能であり、ウェイクアップ時間が最小となります。これらのモードではCPUが停止し、各ペリフェラルクロックは、ソフトウェアによって、SLEEPモードと低電力SLEEPモードの間にONまたはOFFに設定可能です。

これらのモードには、アセンブラ命令のWFI (Wait For Interrupt) 命令またはWFE (Wait for Event) 命令を実行することにより移行します。低電力RUNモードで実行されると、デバイスは低電力SLEEPモードに移行します。

Cortex®-M4システム制御レジスタのSLEEPONEXITビット設定次第では、命令の実行直後か、最も優先度の低い割り込みサブルーチンの終了直後にMCUがSLEEPモードに移行します。この最後の命令では、スタックのポップとプッシュの必要を省くことによって、時間と消費電力の削減が可能です。ただし、スレッドモードが使用されなくなったため、すべての計算はCortex®-M4ハンドラモードで行う必要があります。

SLEEPモード:レンジ1

17

利用可能なペリフェラル

GPIO
DMA
FSMC
QuadSPI
BOR
PVD,PVM
UCPD
USBデバイス
USART
LPUART
I2C
SPI
CAN
SAI
ADC
DAC
OPAMP
COMP
温度センサ
タイマ
LPTIM1
IWDG
WWDG
Systickタイマ
RNG
AES
CRC

Zzz

Cortex®-M4

Flash
メモリ

SRAM1

SRAM2

CCM SRAM

メインレギュレータ(MR)

レンジ1(最大170MHz)

レンジ2(最大26MHz)

低電力レギュレータ(LPR)最大2MHz

利用可能な クロック

HSI16

HSI48

HSE

LSI

LSE

アクティブセル

クロックオフ
セル

パワーダウンの
セル

利用可能な
ペリフェラルとクロック

例:Flashメモリ オン



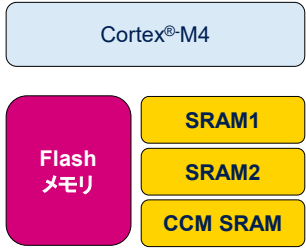
SLEEPモードにおいて、CPUクロックはオフになりまう。
レンジ1ではシステムクロックは最大170MHzです。レンジ2では最大26MHzです。
デフォルトでは、SRAMクロックは有効になっています。
これらは、ソフトウェアによってSLEEPモード中に個別にオフすることができます。
すべてのペリフェラルは、レンジ1でアクティブにすることができます。

SLEEPモード:レンジ2

利用可能なペリフェラル

- GPIO
- DMA
- FSMC
- QuadSPI
- BOR
- PVD,PVM
- UCPD
- USBデバイス
- USART
- LPUART
- I2C
- SPI
- CAN
- SAI
- ADC
- DAC
- OPAMP
- COMP
- 温度センサ
- タイマ
- LPTIM1
- IWDG
- WWDG
- Systickタイマ
- RNG
- AES
- CRC

Zzz



例:Flashメモリアオン、ただしプログラムやイレーズは不可



利用可能なクロック

- HSI16
- HSI48
- HSE
- LSI
- LSE

アクティブセル

クロックオフセル

パワーダウンのセル

利用可能なペリフェラルとクロック



SLEEPモードレンジ2では、USBデバイスと乱数発生器(RNG)を除くすべてのペリフェラルを起動できます。

低電力SLEEPモード

19

利用可能なペリフェラル

- GPIO
- DMA
- FSMC
- QuadSPI
- BOR
- PVD,PVM
- UCPD
- USBデバイス
- USART
- LPUART
- I2C
- SPI
- CAN
- SAI
- ADC
- DAC
- OPAMP
- COMP
- 温度センサ
- タイマ
- LPTIM1
- IWDG
- WWDG
- Systickタイマ
- RNG
- AES
- CRC



Zzz



利用可能なクロック

- HSI16
- HSI48
- HSE
- LSI
- LSE

アクティブセル

クロックオフセル

パワーダウンのセル

利用可能なペリフェラルとクロック

例:Flashメモリオフ

低電力SLEEPモードでは、CPUクロックはオフで、ロジックは低電力レギュレータによって供給されます。システムクロックは最大2MHzです。

Flashメモリは電源オフの設定が可能です。SRAMもオフに設定できます。

USB OTGと乱数発生器(RNG)を除くすべてのペリフェラルを起動できます。

完全保持の最低電力モード 16MHzまで5 μ 秒のウェイクアップ時間

- SRAM1、SRAM2、CCM SRAMとすべてのペリフェラルレジスタが保持
 - すべて的高速クロックが停止
 - Flashはオフに切り替えることが可能
- LSE (32.768kHz外付けオシレータ)とLSI (32kHz内蔵オシレータ)をイネーブル可能
- 複数のペリフェラルのアクティブ化とSTOPモードからのウェイクアップが可能
- ウェイクアップ時のシステムクロックはHSI16
- STOP1はSTOP0とメインレギュレータ・オフと同様、より小さい消費電力だが、より長いウェイクアップ時間



life.augmented

STM32G4デバイスには、完全保持の最低電力モードであり、16MHzで実行モードまでのウェイクアップ時間がわずかに数 μ sの2つのSTOPモード、STOP0と1があります。

SRAMの内容とすべてのペリフェラルレジスタは、STOPモードで保持されます。

すべて的高速クロックが停止します。

32.768kHzの外付けオシレータ、および32kHzの内蔵オシレータを有効にできます。

いくつかのペリフェラルは、アクティブにして、STOPモードからウェイクアップすることができます。

ウェイクアップ時のシステムクロックは、16MHzの内蔵の高速オシレータになります。

STOP1は、メインレギュレータがOFFのSTOP0と状態が似ています。

利用可能なペリフェラル

GPIO
DMA
FSMC
QuadSPI
BOR
PVD,PVM
UCPD
USBデバイス
USART
LPUART
I2C
SPI
CAN
SAI
ADC
DAC
OPAMP
COMP
温度センサ
タイマ
LPTIM1
IWDG
WWDG
Systickタイマ
RNG
AES
CRC

I/Oは保持され、
設定可能



電圧レギュレータはメインレギュレータモードで構成されています。V COREドメイン内のすべてのクロックが停止します。PLLとHSEオシレータは無効になります。

内蔵または外付けの低速オシレータによってクロック供給されたRTCは、アクティブな状態のままに設定できます。

ブラウンアウトリセットは常に有効です。ペリフェラルクロックのほとんどはオフに設定されています。

電源電圧検出、ペリフェラル電圧モニタ、デジタル-アナログコンバータ、オペアンプ、コンパレータ、独立型ウォッチドッグ、低電力タイマ、I2C、UART、低電力UART、UCPDなど、複数のペリフェラルがSTOP0モードで機能します。

すべてのI/Oからのイベントは、アクティブなペリフェラルによって生成された割込みと同様に、STOP0モードからウェイクアップできます。I2C、UART、またはLPUARTは、STOPモード中にHSI16をオンに切り替えて、ウェイクアップ状態を認識し、フレームを受信した後、ウェイクアップフレームでない場合はHSI16をオフにすることができます。この場合、HSI16クロックは、それを要求しているペリフェラルにのみ伝搬されます。

利用可能なペリフェラル

- GPIO
- DMA
- FSMC
- QuadSPI
- BOR**
- PVD,PVM**
- UCPD**
- USBデバイス**
- USART**
- LPUART**
- I2C**
- SPI
- CAN
- SAI
- ADC
- DAC**
- OPAMP**
- COMP**
- 温度センサ
- タイマ
- LPTIM1**
- IWDG**
- WWDG
- Systickタイマ
- RNG
- AES
- CRC

I/Oは保持され、
設定可能

Zzz



STOP1モードはSTOP0と状態が非常に似ていますが、メインレギュレータが停止し、低電力レギュレータに置き換えられるため、電力値がはるかに低くなります。
FlashメモリとHSI16は設定可能であり、停止または有効状態を維持できます。



STOPモード比較

23

	STOP0	STOP1
消費電流 (STM32G474)	25°C、1.8V	
	155μA	46μA、RTCディセーブル
ウェイクアップタイム 16MHz	Flashメモリにて6μsで最初に電源オフ RAMIにて3μs	Flashメモリにて9.8μsで最初に電源オフ RAMIにて6.9μs
ウェイクアップクロック	HSI16、16MHz	
レギュレータ	メインレギュレータ	低電力レギュレータ
ペリフェラル	RTC、I/O、BOR、PVD、PVM、UCPD、DAC、OPAMP、COMP、IWDG 1 LPTIMER 1 LPUART(開始、アドレス一致またはバイト受信) 5 U(S)ART(開始、アドレス一致またはバイト受信) 4 I ² C(アドレス一致)	



life.augmented

各STOPモードを比較します。

STOP0モードの消費電流はSTOP1モードの消費電流よりも高くなりますが、ウェイクアップ時間は短くなります。


STOP0モードでは、メインレギュレータが有効になり、RAMから再起動する際に3 μsの非常に短い起動時間となる一方、STOP1より高い消費電流で実現します。

I²Cアドレス認識はどちらのSTOPモードでも機能し、アドレス一致時にウェイクアップイベントを生成可能です。

UARTとLPUARTのバイト受信はどちらのSTOPモードでも機能し、開始検出、バイト受信、またはアドレス一致イベントの場合にウェイクアップイベントを生成可能です。

内蔵または外付けの低速オシレータからクロックを供給されている場合や、外部ピンからクロックを供給されている場合には、低電力タイマがすべてのイベントでMCUをウェイクアップ可能です。

SRAM2保持を備えた最低電力モード VBATおよびI/O制御に切り替え

- デフォルトで:SRAMもレジスタ保持(電源ダウン時の電圧レギュレータ)
 - 128バイトのバックアップ・レジスタは常に保持
- **SRAM2全体を保持(16KB)**
- **BORは常にオン:VDDの傾きに寄らない安全なりセット**
- 各I/Oは、プルアップ、プルダウン、なしに設定可能
 - APCがPWR_CR3レジスタにセットされている場合、PWR_PUCRx / PWR_PDCRxレジスタ(x = A、B、... H)を適用
 - 外部コンポーネント入力状態の制御が可能
- **5本のウェイクアップ・ピン:5本のウェイクアップ・ピンの極性は設定可能**
-  ウェイクアップ・クロックは16MHzのHSI

life.augmented

STANDBYモードは、16キロバイトのSRAM2を保持可能で、VDDからVBATへの自動切替に対応しており、I/Oレベルはプルアップ回路とプルダウン回路が独立に設定可能である最小電力モードです。

デフォルトでは、電圧レギュレータはパワーダウンモードとなっており、SRAMとペリフェラルレジスタの内容は失われます。128バイトのバックアップ・レジスタは、常に保持されます。

ブラウンアウトリセットは常時オンとなっており、VDDの傾きによらない安全なりセットが保証されます。

各I/Oはプルアップまたはプルダウン付きか無しに設定可能であり、APC制御ビットにより適用およびリリースが行われます。これにより、たとえSTANDBYモード中でも外部コンポーネントの入力状態を制御が可能です。

5つのウェイクアップピンが利用可能で、デバイスをSTANDBYモードからウェイクアップできます。5つのウェイクアップピンのそれぞれの極性は設定可能です。

ウェイクアップクロックは、周波数が16MHzのHSIです。

STANDBYモード、SRAM2

利用可能なペリフェラル

- GPIO
- DMA
- FSMC
- QuadSPI
- BOR**
- PVD,PVM
- UCPD
- USBデバイス
- USART
- LPUART
- I2C
- SPI
- CAN
- SAI
- ADC
- DAC
- OPAMP
- COMP
- 温度センサ
- タイマ
- LPTIM1
- IWDG**
- WWDG
- Systickタイマ
- RNG
- AES
- CRC

I/Oの設定可能
w/またはw/oブルアップ
w/またはw/oブルダウン



SRAM2のSTANDBYモードでは、メインレギュレータの電源がオフになり、低電力レギュレータはコンテンツを保持するためにSRAMに供給します。

内蔵または外付けの低速オシレータによってクロック供給されたRTCは、アクティブな状態のままになることがあります。

ブラウンアウトリセットは常に有効です。独立型ウォッチドッグは、STANDBYモードでも有効にできます。

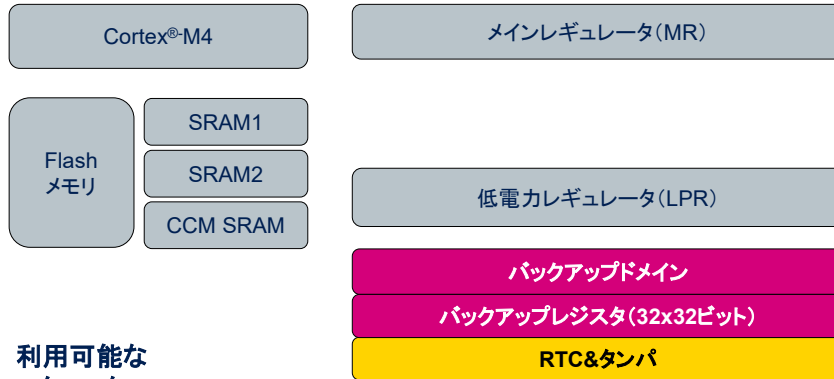
リセット、ブラウンアウトリセット、RTCおよびタンパー検出、独立型ウォッチドッグ、および5ウェイクアップピン上の任意のイベントは、STANDBYモードからマイクロコントローラを復帰させることができます。

STANDBYモード、SRAM保持なし

利用可能なペリフェラル

- GPIO
- DMA
- FSMC
- QuadSPI
- BOR**
- PVD,PVM
- UCPD
- USBデバイス
- USART
- LPUART
- I2C
- SPI
- CAN
- SAI
- ADC
- DAC
- OPAMP
- COMP
- 温度センサ
- タイマ
- LPTIM1
- IWDG**
- WWDG
- Systickタイマ
- RNG
- AES
- CRC

I/Oの設定可能
w/またはw/oプルアップ
w/またはw/oプルダウン



利用可能なクロック

- HSI16
- HSI48
- HSE
- LSI**
- LSE**

アクティブセル

クロックオフセル

パワーダウンのセル

利用可能なペリフェラルとクロック

ウェイクアップイベント

- NRST**
- BOR**
- PVD
- PVM
- RTC&タンパ**
- USBデバイス
- USART
- LPUART
- I2C
- COMP
- LPTIM1
- IWDG**
- GPIO (5WKUPピン)**



SRAM保持なしのSTANDBYモードでは、メインと低電力の両方のレギュレータの電源がオフになります。
ウェイクアップイベントと使用可能なペリフェラル、ウェイクアップソースは、SRAMを使用したSTANDBYモードと同じです。

最低電力モード:15nA!!

- STANDBYと類似しているが、
 - 電力モニタリングなし: BORとPDRなし、VBATへの切り替えなし
 - 電源が1.6V以下に下がった場合、製品の動作は保証されない
 - LSIなし、IWDGなし (LSEでクロック・セキュリティ・チェックを行わない)
 - SHUTDOWNモードを終了すると、PORリセットが生成される
 - バックアップ・ドメイン内のレジスタを除くすべてのレジスタがリセット
 - パッド上でリセットが生成
- 128バイト・バックアップ・レジスタを保存
- ウェイクアップ・ソース: 5本のウェイクアップ・ピン、RTC
- ウェイクアップ・クロックはHSI 16MHz



life.augmented

SHUTDOWNモードは、1.8Vにおいてわずか15nAの消費電流となる、STM32G4の最低電力モードです。

このモードはSTANDBYモードに類似していますが、電力モニタリングはありません。したがってパワーダウンリセットは無効になっており、SHUTDOWNモードではVBATへの切り替えはサポートされていません。したがって、電源が1.6V以下に下がった場合、製品の動作は保証されません。

LSIは使用できず、その結果として独立型ウォッチドッグも使用できません。

デバイスがSHUTDOWNモードを終了するときにはブラウンアウトリセットが生成されます。バックアップドメインにあるもの以外のすべてのレジスタはリセットされ、パッド上にリセット信号が生成されます。

128バイトのバックアップレジスタはSHUTDOWNモードで保持されます。

ウェイクアップソースは、5本のウェイクアップピンとタンパ機能を含むRTCイベントです。

SHUTDOWNモードを終了すると、ウェイクアップクロックは16MHzのHSIになります。

利用可能なペリフェラル

GPIO
DMA
FSMC
QuadSPI
BOR
PVD,PVM
UCPD
USBデバイス
USART
LPUART
I2C
SPI
CAN
SAI
ADC
DAC
OPAMP
COMP
温度センサ
タイマ
LPTIM1
IWDG
WWDG
Systickタイマ
RNG
AES
CRC

I/Oの設定可能
w/またはw/oプルアップ
w/またはw/oプルダウン
ただし、SHUTDOWNから終了するとフローティング



SHUTDOWNモードでは、メインレギュレータと低電力レギュレータの電源がオフになります。

外付けの低速オシレータによってクロックされたRTCは、アクティブなままにできます。

ブラウンアウトリセットは無効になります。外付けの低速クロックのみを有効にできます。

ウェイクアップイベントは、RTCとタンパイベント、リセット、および5本のウェイクアップピンです。

電源モードのまとめ

29

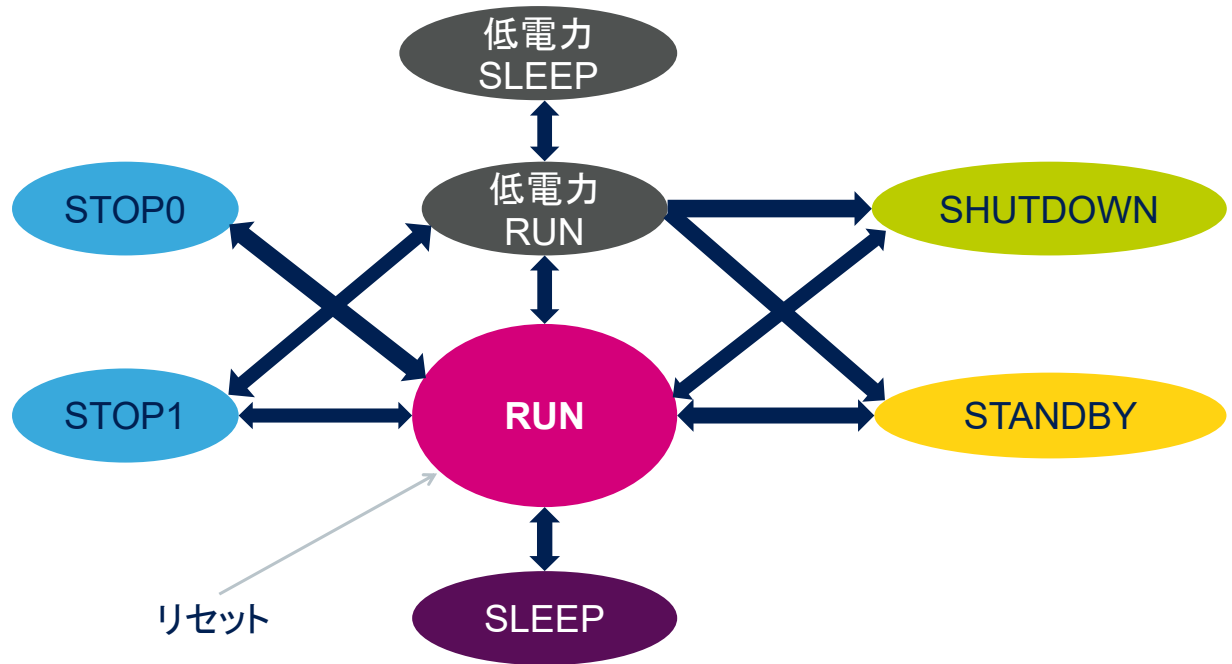
モード	レギュレータ	CPU	Flash	SRAM	クロック	ペリフェラル
RUN	MRレンジ1	可能	オン ⁽¹⁾	オン	任意	すべて
	MRレンジ2					USB、RNG以外すべて
低電力RUN	LPR	可能	オン ⁽¹⁾	オン	任意 PLLを除く	USB、RNG以外すべて
SLEEP	MRレンジ1	不可	オン ⁽¹⁾	オン ⁽²⁾	任意	すべて
	MRレンジ2					任意のITまたはイベント
低電力SLEEP	LPR	不可	オン ⁽¹⁾	オン ⁽²⁾	任意 PLLを除く	すべて 任意のITまたはイベント
STOP0	MR	不可	オフ	オン	LSE/LSI	リセットピン,すべてのI/O BOR、PVD、PVM、RTC、IWDG、COMPx、DACx、OPAMPx、 USARTx、LPUART、I2Cx、LPTIM1、USB、UCPD
STOP1	LPR					
STANDBY	LPR	ダウン	オフ	SRAM2 オン	LSE/LSI	リセットピン、5本のWKUPxピン BOR、RTC、IWDG
	OFF			ダウン		
SHUTDOWN	OFF	ダウン	オフ	ダウン	LSE	リセットピン、5本のWKUPxピン RTC

1. パワーダウンに入れることができ、クロックをオフすることが出来る
2. SRAM1、SRAM2、CCM SRAMは独立してオフ可能



life.augmented

ここには、すべてのSTM32G4電源モードの状態をまとめて示しています。



RUNモードから、低電力SLEEPモード以外のすべての低電力モードにアクセスすることが可能です。

低電力SLEEPモードに入るためには、まず低電力RUNモードに移行し、レギュレータが低電力レギュレータである間に[Wait for Interrupt]または[Wait for Event]命令を実行する必要があります。また、低電力SLEEPモードを終了すると、STM32G4は低電力RUNモードになります。

デバイスが低電力RUNモードの場合、SLEEPモードとSTOP0モードを除くすべての低電力モードに移行できます。STOP0モードは、RUNモードからのみ入力できます。

デバイスが低電力RUNモードからSTOP1モードに入ると、低電力RUNモードは終了します。

デバイスがSTANDBYまたはSHUTDOWNに入ると、RUNモードは終了します。

RTCは動作を継続し、 V_{DD} が失われてもバックアップレジスタは保持

- バックアップドメインに含まれるもの:
 - 32.768kHz LSEオシレータ(3本のタンパピンを含む)からクロックの供給を受けるRTC
 - 128バイトのバックアップ・レジスタ
 - RCC_BDCRを通じてリセット
- V_{DD} がパワーオフからパワーオンを行うと V_{BAT} と V_{DD} との間で内部的に自動切換え
- A/Dコンバータに内部接続された電圧モニタリング($V_{BAT}/3$)
- VBATバッテリー・チャージング

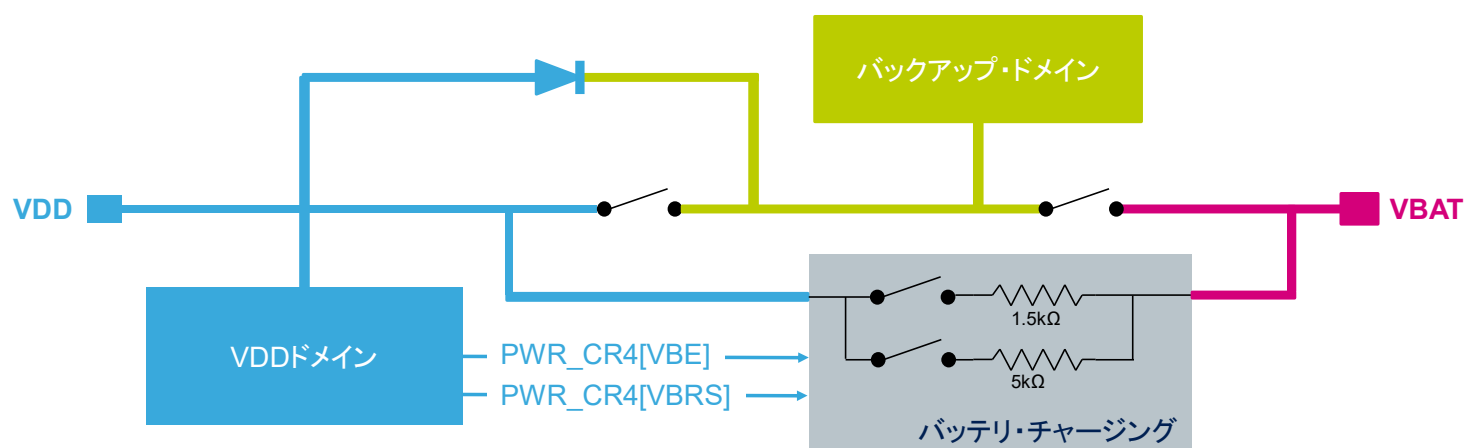


バックアップドメインによって、VBATピンに接続されたバックアップバッテリーのおかげで、VDD電源がダウンした場合にもRTCの機能を維持し、バックアップレジスタを保持することができます。バックアップドメインには、32.768kHzのロースピード外部オシレータからクロック供給を受けるRTCが含まれています。VBATモードでは3本のタンパピンが機能しており、侵入が検知された場合には、VBATドメインにも含まれている128バイトバックアップレジスタが消去されます。バックアップドメインには、RTCクロック制御ロジックも含まれています。VDDがある特定の閾値を下回った場合、バックアップドメインの電源は自動的にVBATに切り換わります。VDDが正常に復帰すると、バックアップドメインの電源は自動的にVDDに戻ります。バックアップバッテリーレベルをモニタするため、VBAT電圧は内部でA/Dコンバータ入力に接続されています。VDDが存在する場合、VBATに接続されたバッテリーはVDD電源から充電可能です。

VBATバックアップ・ドメイン

32

- VBATバッテリー・チャージング: V_{DD} が存在する場合、内部抵抗を通してVBATのスーパーキャパシタの充電が可能



バッテリー充電機能により、VDD電源が存在する場合に、内部抵抗を通してVBATピンに接続されたスーパーキャパシタの充電が可能になります。

充電はソフトウェアによって有効にされ、ソフトウェアに応じて5kΩまたは1.5kΩ抵抗を介して行われます。

VBATモードでは、バッテリーの充電が自動的に無効になります。PWR_CR4レジスタのVBEビットフィールドは、バッテリー充電を可能にします。

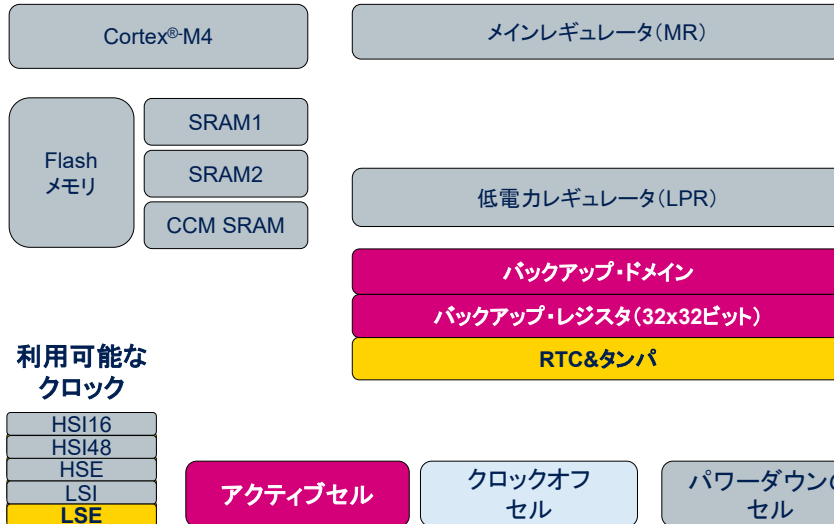
PWR_CR4レジスタのVBR5ビットフィールドは、抵抗値を選択します。

スタートアップフェーズ中に、VDDが $t_{RSTTEMPO}$ 未満で確立され、 $VBAT+0.6V$ より大きいVDDが確立された場合、VDDと電源スイッチ(VBAT)の間に接続された内部ダイオードを通してVBATに電流が流れる可能性があります。

VBATピンに接続されている電源/バッテリーがこの電流の流出をサポートできない場合は、この電源装置とVBATピンの間に外部で低ドロップダイオードを接続することを強くお勧めします。

利用可能なペリフェラル

- GPIO
- DMA
- FSMC
- QuadSPI
- BOR
- PVD,PVM
- UCPD
- USBデバイス
- USART
- LPUART
- I2C
- SPI
- CAN
- SAI
- ADC
- DAC
- OPAMP
- COMP
- 温度センサ
- タイマ
- LPTIM1
- IWDG
- WWDG
- Systickタイマ
- RNG
- AES
- CRC



VBATモードでは、メインレギュレータと低電力レギュレータの電源がオフになります。

外付けの低速オシレータによってクロックされたRTCとタンパは、アクティブなままにできます。

外付けの低速クロックのみを有効にできます。

電源が入っているブロックはRTCとタンパを含むバックアップドメインのみであり、VDD電源が提供されると通常の実行に戻ります。

RTCのVBAT消費電流は1.8Vでおおよそ150nA(TYP)です。

- 次に示す所定の低電力モードを禁止するため、Flashオプションバイトの中で3個のオプションビットを設定可能:
 - nRST_SHDWN:クリアされると、SHUTDOWNモード移行時にリセットを生成
 - nRST_STDBY:クリアされると、STANDBYモード移行時にリセットを生成
 - nRST_STOP:クリアされると、STOPモードへの移行時にリセットを生成

Flashオプションバイトには、特定の低電力モードを禁止する3ビットが使用できます。
クリアされると、関連する低電力モードに入る代わりにリセットが生成されます。

- DBGMCU_CRLレジスタの3ビットにより、SLEEP、STOP、STANDBY、SHUTDOWNの各モードでのデバッグが可能:
 - DBG_STANDBY:セットされると、デジタル・パートはSTANDBYモードとSHUTDOWNモードでは電源がオフになり、HCLKとFCLKはオンのままで内蔵のRCによってクロック提供される
 - さらに、STANDBY/SHUTDOWN中にMCUはシステム・リセット
 - DBG_STOP:セットされると、HCLKとFCLKはSTOPモードでオンのまま、内部RCによってクロック提供される
 - DBG_SLEEP:セットされると、HCLKとFCLKはSLEEPモードと低電力SLEEPモードのまま
- これらのビットがセットされると、低電力モードの間、デバッガとの接続は維持
 - ウェイクアップ後もデバッグは可能



マイクロコントローラは、ユーザーが低電力モードでソフトウェアをデバッグすることを可能にする特別な手段を提供します。デバッグ制御レジスタでは、3ビットを使用することによりSLEEP、STOP、STANDBY、SHUTDOWNの各モードでデバッグを行えるようになります。これによって、STANDBYモードとSHUTDOWNモードでレギュレータがオンで維持され、HCLKクロックとFCLKクロックはオンで維持されて、デバッガはアクティブな状態を維持します。これによって、低電力モードの間にデバッガとの接続が維持され、ウェイクアップ後にもデバッグを継続します。これらのビットがセットされると、クロックとレギュレータが強制的に有効に保たれて、すべての低電力モードで消費電流が増加することから、MCUがデバッグ中ではない場合には、これらのビットをクリアすることを忘れないでください。

- 電源モードに対する依存関係の詳細については、ペリフェラル・トレーニング資料の以下のリストを参照してください。
 - リセットおよびクロック制御(RCC)
 - リアルタイム・クロック(RTC)
 - STM32CubeMX、電力消費計算機能



このトレーニングに加えて、次のプレゼンテーションが参照できます。

- リセットおよびクロック制御(RCC)
- リアルタイムクロック(RTC)
- STM32CubeMX、電力消費計算機能の説明